

「坂の上の雲」では分からない明治の群像

2009年12月8日

aokitoru88@gmail.com 青木 亮

先月末からNHKテレビでドラマ「坂の上の雲」が始まった。これを機会に原作にもなく多分このドラマでも描かれないであろう「坂の上の雲」の主要な人物の別の面を書いてみたい。

小説という形式上やむを得ないが、司馬の小説は来年大河ドラマで取り上げられる「龍馬がゆく」もそうだが高級講談と心得たほうがいい。司馬は「韃靼疾風録」を最後に小説という形式から離れる。私はその理由は「見てきたようなウソ」を書き、自分と読者を欺くことに飽いたからだと思っている。それからは「街道に行く」、「この国のかたち」等歴史紀行文や史論に専念する。そこでは小説と違ってまじめに（自分に誠実に）史実と向かい合っている。司馬作品中長く残るのはこれらのノンフィクションだろう。

司馬史観とはなんぞや？

私は司馬史観など殊更取り上げる価値はないと思っているが、強いて言えば小説における英雄史観と歴史紀行文や史論における英雄史観の否定乃至唯物史観という矛盾した混交物だと思う。ここで唯物史観と言ってもマルクス主義とは関係がない。例えば中国史では漢帝国を頂点にその後長く停滞が続いた理由として司馬は製鉄能力の低下を挙げている。なぜ製鉄能力は低下したか？ それは燃料となる森林資源の減少のためであると司馬は主張する。私が司馬を唯物史観と称するのはそういう意味である。中国史に関する限り唯鉄史観と言ってもいいかもしれない。

ただ唯物史観では小説にならないので自ずから英雄史観にならざるを得ない。その一例を挙げれば「坂の上の雲」では秋山兄弟（兄好古は騎兵第一旅団長、弟真之は連合艦隊参謀）がいなければ日露戦争に勝てなかったかもしれないと書きながら、史論「明治という時代」では、秋山兄弟がいなければ、誰かが代わりに彼らの役割を果たしたであろうと書いている。真之に代わり得る人材としては佐藤鉄太郎（最終階級海軍中將）を例として挙げている。司馬の日露戦争観は揺れている。一方では「日露戦争までの日本の進路はよかった」と書きながら他方では「日露戦争は戦うべからざる戦争であった」と書いている（「坂の上の雲」文庫本後書き）。一方では「日露戦争は自衛戦争であった。もしあの戦争に敗れていたら私達は今頃ロシア語を話していただろう」と書きながら、他方では「狭小な国土に五千万もの人口をかかえて人口稠密で資源が乏しくめぼしい産業といえば農業しかなかった日本にロシアは興味をもたなかった」と書いている。

今となっては、日露戦争を理解するには「坂の上の雲」では不十分。詳細は以下各人物の項で述べる。

伊藤博文と山縣有朋

二人共一応松蔭門下ということになっているが、師への思いはかなり違う。伊藤は松蔭門下と言われるのを喜ばなかったという。松蔭の伊藤評価は高くなかったし、それを伊藤も知っていた。松蔭は友人への紹介状で「周旋の才あり」と、政治的才能を認めていたのではないかと意外に思う人もいるかもしれない。だがこれには前段があって「この男才劣り学幼きも周旋の才あり」。全体として高い評価とは言えない。松蔭の高杉晋作や久坂玄瑞評価とは比較にならない。この二人に吉田稔麿、入江九一を加えて松蔭門下の四天王という。みな維新を見ることなく死ぬ。伊藤が初代内閣総理大臣になった時郷里の人は「吉田稔麿が生きていれば初代内閣総理大臣は吉田だったろう」と嘯きあった。ここからも松蔭門下はいかに人材が豊富だったかがわかる。

伊藤にとっては、松蔭より高杉との関係が重要だ。ただ高杉という天才の驥尾に付した幸運児と言っては、伊藤にいささか酷かもしれない。伊藤がいなければ功山寺の拳兵は成功しなかったかもしれない。劇作家福田善之は「維新風雲録―暴れ奇兵隊」の中で「伊藤の70年近い生涯の中で為した最もいいことは功山寺の拳兵で高杉を助けたことだ」と書いている。

高杉記念館である東行庵（高杉は西行をもじって東行と号していた）の碑文「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し、衆目駭然敢えて正視するものなし」は伊藤によるもの。

伊藤は明治六年の政変でも重要な役割を演じている。両派の板挟みになって卒倒し人事不省に陥った太政大臣三条実美の代理に岩倉具視を据えるという奇策は、伊藤の発案になる。これによっていわゆる内治派はいわゆる征韓派に勝ちをおさめる。師の松蔭も評価した「周旋の才」を遺憾なく発揮した瞬間であった。

伊藤は元々同郷の桂小五郎に引き立てられて人がましくなったけれども、岩倉使節団の外遊中から大久保利通の腹心的地位を占めるようになった。西南戦争中木戸、西郷が逝き、戦後大久保が暗殺された後伊藤が明治政府の中心になったのは自然の成行きであった。

伊藤の政治的業績の一つが**明治憲法の制定**。江藤淳は華麗な体系などと持ち上げているがまったく同意できない。大正後期から昭和初期にかけて国家意思は八岐大蛇のように四分五裂するが、その根源は、どこに頭があるのかわからない明治憲法にある。この憲法は一見すると天皇親政、よくよく見ると透かし模様のように立憲君主制が浮かび上がるという二重構造になっている。丸山真男がいうところの「顕教（天皇親政）」と「密教（立憲君主制、天皇機関説）」である。昭和に入り顕教が密教を圧殺したのが「国体明徴運動と天皇機関説の否定」。ここから天皇の神格化が始まる。

あの憲法がどこに権力の中心があるのかわからない仕組みになったのは、憲法制定に先立ち存在した内閣も内閣総理大臣も規定しなかったことに起因する。これは今でも憲法学者を悩ませている難問で定説はないが、「内閣総理大臣が武士社会における征夷大將軍の如き存在となり天皇を蔑ろにする」の恐れた**井上毅**の主張によるとする説が有力か。

統帥権の独立

昭和に入り、軍部特に陸軍は統帥権の独立と称して政治的発言権を強める。早くも日露戦争後伊藤は、満洲をまるで日本の占領地であるかのように振る舞う陸軍の横暴に悩まされる。

以下猪木正道「軍国日本の興亡の『満洲問題に関する協議会』」の項から

日露戦争終結の翌年3月31日、駐日英国大使マクドナルドの朝鮮統監伊藤博文宛て手紙で、満洲における日本軍による閉鎖は、ロシア占領当時より厳しいことを非難し、

「もしこのまま推移すれば、日本はやがて与国の同情を失うであろう」と指摘。

事態を憂慮した伊藤は、首相西園寺に「満洲問題協議会」を開催させた。

同会議における伊藤の発言

満洲における日本軍の専横が欧米の不信を招いていることを指摘した後「もし事態をこのまま放置すれば、清国二十一省の人心は終に日本に反抗するに至るであろう」と警告し、次いで陸軍の満洲軍政署設置批判に移り、

「これに関する規定を見ると、清国人が不満を抱くのは当然であろう。中略。もしこれを実施すれば清国人の活動する余地は更にはない。否日本領事といえども活動できぬ。自分の思う所、軍政署は廃止して地方行政は清国官憲に一任せねばならぬ」

陸軍の代表である参謀総長児玉源太郎が縷々弁解したのに対し伊藤の怒りは爆発し、

「余の見所、児玉大將らは、満洲における日本の地位を根本的に誤解しておられるようである。満洲における日本の権利は、講和条約によってロシアから譲り受けたもの即ち遼東半島租借地と鉄道その他にはなにもない。中略。戦時中からわが国人はしきりに満洲経営なるものを説いていたが、満洲は我が国の属地ではなく、純然たるシナの領土である。属地でもない所に我が主権が行われる道理がない。以下略」 以上引用

ただ明治憲法における軍に関する規定は、それ以前に山縣有朋等が作った既成の制度を追認しただけという面もあるので、統帥権暴走の責任を憲法制定者である伊藤だけの責任に帰すことはできないが、泉下の松蔭先生は、伊藤の憲法に及第点を付けるだろうか。

山縣有朋は、近代史における重要性に比べて甚だ不人気な政治家だが、作家今東光の「毒舌日本史」にやや意外なエピソードが載っている。

幕末津軽に今東光の祖父に当たる伊東広之進という知識人がいた。吉田松蔭は広之進に会うため弘前まで来た。広之進の子伊東重（今東光の叔父）は、その時松蔭が泊まった部屋を「偉人堂」として残すことを思い立ち、地元代議士工藤十三雄を通じて、今をときめく松下村塾の大立者山縣に扁額を頼むことにした。頼まれた山縣は快諾し「すぐ書く」と言う。工藤が「すぐ書いていただけるのですか？」と驚くと、山縣「不服か」、工藤「と

んでもありません。山縣公に揮毫を頼んでも何年も待たされると聞いていたものですから」、山縣「松蔭先生を待たせるわけにはいかないじゃないか」。

山縣は「偉人の部屋」と揮毫し、次いで「門下生有朋」としか書かなかった。当時山縣は従一位、大勲位、功一級、公爵、元帥と位人臣を極めていたのに、そうした位階勲等は一切書かなかった。師の前で自身の栄達を誇るのを避けたのだろう。

山縣は長州閥の権化のように思われているが、案外そうでもない。藩閥に拘らず人材を抜擢している。軍医総監**森林太郎**、陸軍の制度規程を作った**西周**（にし・あまね）はともに石見人。優れた軍事技術者**有坂成章**も山縣が抜擢した人材。有坂は確かに長州人だが、極めて優れた軍事技術者であった。

有坂は、旅順戦で日本軍が苦戦していることを聞きつけて、参謀総長山縣に進言する。「旅順要塞のベトンを破砕できるのは、我が国では要塞砲しかありません。あれを移動して使うべきです」、山縣「有坂が言うのであれば間違いあるまい」と直ちに認可する。あの巨砲を使わなければ旅順陥落前に日本の戦力は尽きたかもしれない。

第一次大戦中大隈内閣**加藤高明外相**の対華二十一箇条要求が代表する火事場泥棒的外交を以下のように厳しく批判している。

児島襄「**平和の失速**—大正時代とシベリア出兵第三卷」P42 第一次世界大戦の項から。

対独参戦を決めるに当り元老（山縣、大山、松方、井上）の意見を聞くことになり首相官邸で先ず外相**加藤高明**が参戦方針を説明した。ここで加藤は日本が参戦目的を三つあげる。日英同盟上の義務、三国干渉への復讐、中国における利権の拡大である。

山縣は不快感をかきたてられた。「戦争は国家の危難を排除するためにのみ認められるはずであるのに**加藤外相**によれば主として（中国における）経済的利益を追求するために戦争しようとする印象を受ける。それは邪道ではないのか。中略 この戦争が終われば米国の排日機運が示すように必ずや白人対黄色人種の新たな人種間戦争が生まれるに違いない。日本は同じ黄色人種としてこれまでの（侵略的）**対支那政策**をあらため、日中友好を進めて味方を増やさなければならぬ」。火事場泥棒式に中国に進出しようとする加藤外交への批判である。以上引用

政友会総裁**原敬**も対独参戦を懸念し山縣の私邸を訪ね以下の意見を述べる。同書 P63

「単に漁夫の利或いは火事場泥棒式に同盟関係を理由として開戦が認められ、それが先例になれば道義の否認にほかならず政治道徳と国民道徳の荒廃は必至となり、誠に憂慮に耐えない」。山縣も完全に同意見であった。後年山縣が原敬を首相に推す心境になったのはこの時の会談の印象があったためかもしれない。

松方正義

「坂の上の雲」では影が薄い、薩摩藩の維新第一世代
第一次大戦中元勳松方が首相寺内正毅に出した対華政策に関する意見書
下村海南「終戦秘史」P353 から引用

勢力なき信義は空言なり信義なき勢力は禍なり。近年我が国の対華政策はこの根本原則を放擲して徒に一時の権謀術策を弄し、国家百年の禍機醸成するを顧みざるものにして、隣邦を敵たらしむるのみならず延いて我が国の世界における信用を失墜したることいかばかりか。

領土保全機会均等は列強間で協定したる世界の原則なるにかかわらず、対華政策は徒に我が強勢を頼みとし彼の弱小に乗じて威嚇し又は威喝し時に欺罔の小計を弄し時に強請の拙策を行い、唯彼をして我を怨嗟せしめ我に離反せしめ我をもって不倶戴天の仇敵たらしめ我をもって子々孫々まで呪詛の対象たらしめ、眼前咫尺の地にある中国に対しその威信が零にまで低下したるはこの根本的主義に背戻したるが為にあらずや。

我が国嘗て倭寇あり中国の福建浙江山東の沿海を寇掠す。今や大正の御代において満蒙に華南に現代の倭寇と称すべきあり、中国の治安を攪乱し日本帝国の面目を毀損する所少なからず、而してその禍根が蔓延するや、日本帝国をして世界の孤児たらしめ列強怨嗟的たらしめずんば止まざらんとす。中略

今にして速やかに一大鉄槌を加え根本的に改善せずんば帝国将来の危殆実測るべからざるものあり。以上引用

特にこの箇所に注目してほしい。

今や大正の御代において満蒙に華南に現代の倭寇と称すべきあり、中国の治安を攪乱し日本帝国の面目を毀損する所少なからず、而してその禍根が蔓延するや、日本帝国をして世界の孤児たらしめ列強怨嗟的たらしめずんば止まざらんとす。

上記提言に見られるように大隈内閣の対華 21 個条要求以来の我が国の対中政策を松方は山縣有朋と共に痛論している。それに遡る明治 39 年日露終戦の翌年伊藤博文も満洲会議で満洲を日本の占領地のように振る舞い欧米の不信の招いた陸軍の代表たる参謀総長児玉源太郎を強く叱責している。こうしてみると伊藤、山縣、松方等維新の第一世代と児玉源太郎、小村寿太郎、加藤高明等第二世代との識見の差は歴然としている（第二世代の例外は、原敬、加藤友三郎、高橋是清）。そして第三世代が大日本帝国を滅ぼす。

ここで昭和天皇が敗戦直後疎開先にいた皇太子（当時）宛に書いた手紙の一節を紹介する。

（敗戦に至ったのは）我が国人はあまりに皇国を信じ過ぎて英米を侮ったことである。我が軍人は精神に重きを置きすぎて科学を忘れたことである

明治天皇の時には山縣有朋、大山巖、山本権兵衛等の如き陸海軍の名将があったが今度の大戦時はあたかも第一次世界大戦のドイツの如く軍人が跋扈して大局を考へず進むを知って退くことを知らなかったからです。

正岡子規と陸羯南

子規の「柿食えば鐘がなるなり法隆寺」は有名だが、実際には鐘は法隆寺ではなく東大寺だった。当時子規は東大寺近くの宿に泊まっていたし、その宿に柿の木もあった。もし「柿食えば鐘がなるなり東大寺」だったら同じように有名になっていただろうか？ 芭蕉の俳句もそうだが、子規のそれも写実的とは限らない。

子規と羯南の交誼は美しい。羯南がいなければ子規が日本文学史にあれほどの足跡を残すことはなかったであろう。子規は、羯南の親友にして外交官であった加藤拓川の甥に当たる。子規は叔父の加藤を頼って東京に出たのに、加藤は急に海外勤務を命じられたので甥を羯南に託したのである。羯南は親友の負託に十分すぎるほど応えた。

司馬は「この国のかたち 75 『徳』」の中で羯南のことを次のように書いている。

「論語の中でも朗々誦すべき名文とされる「以って六尺の孤を託すべき、以って百里の命に寄すべく、大節に臨んで奪うべからず、君子人か、君子人なり（泰伯編）の行りはあたかも羯南のために書かれたようである」以上引用　これ以上の贅辞はない。

蛇足だが上記論語の一節の意味

幼い孤児の主君を託することができ、一国の宰相も任せることができ、大事に臨んで決して節を曲げない、こうした人物こそ君子である。

秋山好古

好古の独創は、それまで馬上でサーベルを振るう戦士としての騎兵を、馬で移動する歩兵（妙な言い方だが）に変えたことだ。秋山隊は敵騎兵と遭遇するや、下馬して当時少なかった機関銃でサーベルを振りかざして突進する敵騎兵を迎え撃つ。敵はひとたまりもない。戦争はスポーツと違ってルールはない。好古はこの着想を、戦国時代の有名な長篠の合戦から得たのではないかと私は考えている。陸軍大学校では古今東西の戦史（勿論日本の戦史も）を教材としていたのでそれほど突拍子もない連想ではないと思う。弟の真之も瀬戸内水軍の戦法を深く研究していた。

好古は日露戦争陸戦の英雄として当然ながら大将にまで進級し、栄光に包まれて軍歴を終えた後郷里松山中学校の校長となる。好古ほどのキャリアであればもっと条件のいい再就職先はいくらでもあったと思うが、こうした名利に恬淡とした生き方は弟真之にも通じる。

好古は無類の酒好きで、戦闘中でも酒を手放さなかった。満洲の戦地では本国からくる貴重なわずかな清酒は部下に譲り、自分は現地の高粱酒（白酒）で我慢していた。

秋山真之

真之は、日露戦争で戦争の悲惨さを見て、人殺しを生業とする自分の生き方が嫌になり、何度も「軍人を辞めて坊主になる」といい周囲を手こずらせている。比較的短命であったので最終階級は中将どまり。

彼が大本教の信者であったことは戦前ひた隠しにされた。帝国海軍軍人にして日本海海戦勝利の立役者が、不敬罪で大弾圧された大本教に入信していたとなれば海軍の大スキャンダルだ。真之は子規の親友であり最初共に文学を志していたくらいだから軍人としては繊細過ぎたのかもしれない。軍人と宗教と言えば、国柱会の石原莞爾を連想するが、そもそも石原の戦争観自体、日蓮の影響が色濃い。

「天気晴朗なれども波高し」、「連合艦隊解散の辞」に窺われる豊かな文才と軍事的天才。この二つは一見矛盾しているようだが実はそうではない。どちらも豊かな想像力を必要とするからである。シーザー、ナポレオン、アラビアのロレンス、「出師の表」の諸葛孔明、詩人でもあった魏の曹操などが思い浮かぶ。

中国国民党の大幹部であった**戴季陶**に「**日本論**」という本がある。辛亥革命以後の日中関係を知る上で有益な本。ここでは深い敬意をもって真之を描いている。ここで描かれた真之は軍人というより預言者の風貌を呈している。真之は深い同情をもって中国の行末を危惧していたことがわかる。

この本の中で**桂太郎**の言い分がおもしろい。「清国がだらしなかったからロシアの南下を招き、日本はそれを脅威に感じ、いわば清国になりかわってロシア相手に国運を賭して戦った。それを侵略者呼ばわりされるのは心外だ」。

旅順戦初期の閉塞作戦について。

旅順港の入り口は非常に狭いので、ここに老朽船を沈めてロシア軍艦の出入りを妨げようとした。残念ながらこの作戦はロシア側の猛烈な砲撃によって目標地点に近づけず失敗した。軍神**広瀬武夫**はこの時戦死。私は、この作戦が仮に成功したとしても、ロシア側は容易にこの障害を爆砕できたのであるから、この作戦は無意味であったと思っている。

尚この作戦は、直前に米国駐在海軍武官として米西戦争で米海軍がキューバで実施したサンチャゴ閉塞作戦を観戦した連合艦隊参謀秋山真之の発案による。

「**敵艦見ゆとの警報に接し連合艦隊は直ちに出動これを撃滅せんとす**」。これは飯田久恒参謀の草案。これに秋山参謀が付け加えた部分が有名な「**本日天気晴朗なれども波高し**」。

これを見て**海軍大臣山本権兵衛**は「いらざる修辭である」と言っている顔をしなかったが、これは山本が間違っている。海戦において見晴らしがいいことと波が高いことはいずれも重要な情報である。単なる文学的修辭ではない。秋山はこれによって何を言おうとしたのか？

司馬遼太郎は次のように解釈している。天気晴朗故に敵艦を見失うことはない、しかも波が高いのは砲術に優れた我が艦隊に有利である。つまり連合艦隊の勝利を暗に予告して

いる。この司馬解釈は、前段はいいが、後段の「波が高いのは我が方に有利である」とする解釈はいただけない。波が高いのは日露双方にとって同じ条件であり、日本側に有利とは必ずしも言えないからだ。

半藤一利はこの点に関し「日露戦争」で極めて説得力ある説を提示している。秋山自身が策定した七段戦法の第一段である**繫累機雷**による先制攻撃は難しいことを予告しており（実際取り止めになった）重要な軍事情報だというのだ。というわけで残念ながら繫累機雷はこの海戦では使えなかったが、同じく日本人発明者の名にちなむ下瀬（雅允、工学博士学士院賞）火薬、伊集院（五郎、元帥）信管は存分に威力を発揮することになる。この二つの発明がなければあれほどの完勝はなかったであろう。

尚繫累機雷とは、複数の機雷をロープでつないで敵艦がそのロープを引っ掛ければ自ずと機雷を引き寄せることになり触雷から逃れられない仕掛けであり、当時日本が独自に開発したもの。これは戦前の極秘軍事情報であった。

児玉源太郎と乃木希典

児玉は、長州は長州でも支藩の徳山藩。従って乃木と違い、長州の嫡流ではない。乃木のような有力な引きもなく下士官軍曹として軍歴を始めている。それが後年陸軍大臣、参謀総長を努め、長州閥のホープと目されるようになったのだからいかに優れていたかわかる。明治十年西南戦争では官軍として熊本籠城戦に参加。台湾総督時代には**後藤新平**を起用し民生に多大な成果を上げた。

児玉は外相**小村寿太郎**と並ぶ対露開戦論の中心であった。私はこの点及び日露戦後日本の満洲支配の先鞭をつけたことの二点で、児玉の近代史における役割には否定的である。もっとも同じ理由から逆に高く評価する人も多い。

児玉が満洲軍総司令官**大山巖**の代理として、旅順戦に難渋している第三軍に乗り込み、一時乃木の指揮権を取り上げ、203高地を攻略する行は「坂の上の雲」全編のハイライト。これで児玉ファンになった人も多い。蛇足だが菅直人氏の子息の名も源太郎。

だが児玉はその前がいけない。海軍や東京の参謀本部では早くから着弾観測所として203高地の占領を主張していたが、満洲軍総司令部も第三軍も聞かなかった。遅まきながら同高地を攻撃目標に転換した時は、既にロシア軍が相当防備を強化した後であったため甚大な犠牲を強いられた。

実は日露戦争では戦争には勝ったが情報戦においては幾つかの重要な失敗がある。

先ずロシアが遼東半島を租借してから旅順港の要塞を強化したことを知らなかった。次に開戦となり乃木第三軍が旅順要塞を攻めた時、山越えの盲撃ちであったため旅順艦隊の被害程度を知らなかった。12月の第三回総攻撃で旅順要塞を落とし旅順艦隊も壊滅させたが実は旅順艦隊は、それ以前に日本の砲撃で相当の被害があったし艦砲を外して陸戦に転用したためほとんどスクラップに等しかった。スクラップを攻撃するためにおびただしい犠牲をだすことになった。

そもそも日本はバルチック艦隊の東亜への回航時期の目算について重大な誤算があった。バルチック艦隊が母港を出港したのが明治37年10月中旬。これは日本も把握し早ければ明年1月中にも来航するとみたが実際に来たのは5月下旬。

同艦隊の回航が遅れたのはいくつか要因があり、その全てを日本側が把握するよう求めるのは、ないものねだりになるが、それにしてもこの4ヶ月もの誤差がもつ意味は大きかった。乃木第三軍があれば無理攻めしたのは海軍から矢の催促があったためだが、あれほどバルチック艦隊の回航が遅れるのであればあんな無理攻めは必要がなかった。まして旅順艦隊はほとんどスクラップと化していたのだ。

というわけで司馬遼太郎が「坂の上の雲」で書いたように第三軍司令官乃木を無能と貶め、満州軍総参謀長児玉源太郎の神算鬼謀を褒めそやすのはフェアとは言えない。司馬が得ていた史料上の制約には配慮する必要があるが。

そもそも旅順要塞が日清戦争時から飛躍的に強化されているとの情報収集を怠ったのは開戦前参謀次長の任にあった児玉の責任である。参謀本部は軍事情報の収集もその任務とする。

乃木希典の師は松蔭の叔父玉木文之進であるので松蔭は相弟子に当たる。その上長州御楯隊総督御堀耕助は従兄弟に当たる。乃木は長州藩の嫡流であったのだ。御堀耕助は従兄弟の乃木のことを気にかけて瀕死の床で、薩摩の重鎮にして陸軍大幹部の**黒田清隆**に乃木のことを託す。黒田はこの約束を忘れず明治四年乃木をいきなり少佐として任官させた。ほぼ同時期に軍曹として陸軍に入った児玉源太郎より五階級上だからこれがいかに破格の処遇だったかわかる。乃木も後年、生涯で一番うれしかったのは少佐に任官した時だったと述懐している。

日清戦争が勃発した時、満州軍の四つの軍司令官は、それぞれ第一軍薩摩藩黒木為楨、第二軍小倉藩奥保鞏、第四軍薩摩藩野津道貫。その中に長州を一人は入りたいというので山縣が第三軍司令官に乃木を押し込んだ。もっとも単に藩閥的思惑からではなく乃木は十年前の日清戦争の際、第一旅団長として旅順をわずか1日で攻略した実績も考慮された。乃木に不運だったのは参謀長に薩摩の伊地知幸介を配されたことだ。伊地知は軍人として思考に柔軟性がなく、海軍に対する縄張り意識も強く海軍の助言（攻撃対象を旅順要塞正面ではなく203高地に転換すること、日本本土の要塞砲の使用等）に耳を貸さなかった。参謀長の役割は非常に重要で、作戦はすべて参謀長が起案し、司令官はめくら判を押すだけということが多かった。総司令官大山と総参謀長児玉の関係もそうであった。

戦前陸軍の一部でひそかに囁かれていた乃木無能論を戦後始めて声高に語ったのが司馬。旅順要塞攻撃にあれほどの出血を強いられたのは事前に要塞強化の情報収集を怠り、その上藩閥的人事で長州の乃木を司令官に、薩摩の伊地知を参謀長に据えた陸軍全体の責任だろう。

山縣ら陸軍首脳は、一旦乃木更迭を決めるが、乃木を愛していた天皇の反対で断念する。

旅順戦で大勢の将兵を死なせたことは、彼の終生の負い目となった。

私は、2003年の春旅順港に近い203高地の山頂に立った。日露戦争当時は不毛のはげ山だったが今は灌木で覆われ、往時の面影はない。旅順港を見下ろす位置にあるという先入観があったが、意外に港は遠いと感じた(3km前後か)。山頂に乃木が建てた「爾靈山」の慰霊塔が残されていたのも意外だった。尚中国語で「爾靈山」と「二〇三」は音が同じ。漢詩文の素養が深かった乃木は中国語の音も知っていた。

水師營の会見所もあったが、今あるのは文革中破壊されたのを日本人観光客目当てに復元したもの。

乃木殉死のこと

乃木は遺書の冒頭で「西南戦争の時、軍旗をなくして以来死処を探していた」と書いている。本心だろうか。軍旗の喪失は35年前の話だ。明治十年といえば国軍ができて日も浅い。その当時軍旗をそれほど神聖視する思想があったのだろうか。私は、旅順戦で大勢の将兵を死なせた負い目、本来解任されるべきところを天皇の温情によって名誉を救われたことが大きかったのではないかと見ている。ではなぜ遺書にそれを書かなかったのか？ それを書けば旅順戦で戦死した兵士の遺族は、乃木解任に反対した天皇を恨むかもしれない。乃木はそれを怖れたのではないか。乃木ほどの有名人であれば、死後遺書は公表されるのを前提で書いたはずだ。以上のように書いた後以下の記述を見つけた。

ドナルド・キーンの「明治天皇四巻」P396&397から引用

日露戦争後の東京凱旋の日、乃木は自分が命じた旅順攻撃で死んだ多くの将兵の犠牲を償うため割腹して詫びたいと天皇に申し述べた。天皇は最初何も言わなかったが、乃木が退出しようとした時、呼び止めて次のように沙汰した。

「お前が割腹して私に詫びようとする衷情はよくわかる。だが今はお前が死すべき時ではない。もしどうしても死にたいのであれば私の死後にしなさい」

注釈によるとこの出所は山路愛山の「乃木大将」。ここでは愛山の原資料までは分からないが、天皇と乃木の間でこうした遣り取りは、きっとあったに違いない。

山本権兵衛と東郷平八郎

山本は日露戦争時の海軍大臣。山本は明治31年から39年まで8年もの間海軍大臣の地位にあった。それ以前も西郷従道海軍の下大臣官房主事として海軍の大リストラを主導している。つまり日露戦争に勝利する明治海軍を作ったのは山本と言っても過言ではない。それまでの陸軍主、海軍従の関係を陸海対等にしたのも山本。但しその功罪評価は分かれるところだ。

江藤淳(本名江頭淳夫)と(当時)雅子皇太子妃殿下の共通の曾祖父に当たる江頭安太郎海軍中將は山本の腹心の部下であった。江藤は、曾祖父の縁で「山本権兵衛伝」としての小

説「海は甦る」を書いた。江頭に長命が与えられていたら大将にも大臣にもなったかもしれない。

東郷平八郎は、恐らく戦前最も有名な日本人ではなかったか。その名声はトラファルガー海戦のネルソンに匹敵する。

但し昭和に入り、ロンドン軍縮条約を巡って海軍が条約派（軍縮派、英米との協調を重視）と艦隊派（軍拡派、英米との対立も辞せず）に分裂した時、艦隊派のシンボルとして条約派の肅清に力を貸したのは、晩節を汚す行為であり惜しまれる。ネルソンが旗艦上で戦死したように東郷も三笠艦橋で戦死したほうが日本のためにはよかった。

最後の海軍大将井上成美が、東郷を一等大将に挙げないのはここに理由がある。因みに井上成美は明治建軍以来昭和20年8月敗戦まで77人いる海軍大将（元帥を含む）中、一等大将としては山本権兵衛、加藤友三郎、米内光政の三人だけ挙げ、東郷も山本五十六も外している。

丁字戦法或いは東郷ターンが、誰の発案か議論がある。東郷説、秋山真之説に加えて最近では山屋他人説もある。だがこの議論はあまり意味がない。千変万化する戦場にあって臨機にどの戦法を採用するかは偏に司令官の責任である。それに丁字戦法が成り立つのは艦隊速度が敵艦隊より一定程度速いという条件が欠かせない。そうでなければ敵艦隊より長距離を航行する分、敵を取り逃がす可能性が高くなる。そして彼我の速度比は、実際に戦場で敵と見えなければわからない。

司馬は「坂の上の雲」で「東郷がバルチック艦隊は（太平洋、津軽海峡経由ではなく）朝鮮海峡を来ると信じて疑わなかったことが彼を世界海戦史上に残る名将にした」と書いている。だが最近発見された資料「**極秘明治三十七八年海戦史**」でこの見方は覆された。東郷は5月25日、あと一日敵艦隊を発見できなければ津軽海峡日本海側に移動せよという条件付き命令を発した。もし移動していれば、海戦場は北海道沿岸となり相当数の敵艦船はウラジオストックに遁走したであろう。海戦直前の幹部会議で移動に反対したのは最初第二艦隊参謀長藤井較一だけであったが、遅れて会議に参加した第二戦隊司令官島村速雄も藤井説を強く支持したため移動はなくなった。

余談だが東郷は貸家を多く持っていたが、家主としての義務である修繕はロクにしないのに家賃の取り立ては厳しく、店子の評判はすこぶる悪かった。乃木が陸軍大将、伯爵としての俸給をほとんど戦争遺族や貧しい人のために使ったのと比較したくなる。

「東郷は運のいい男ですから」の意味するもの
井沢元彦「逆説の日本史26」

日露戦争勃発に伴い海軍大臣山本権兵衛は、常備艦隊司令長官中将日高壯之丞を当然連合艦隊司令長官に起用するものと思われていた。日高自身も。ところが山本の人事は、窓際族と思われていた舞鶴鎮守府司令長官だった東郷平八郎の抜擢だった。この人事を明治

天皇から問われた山本が「東郷は運のいい男ですから」と答えたことはよく知られている。以上引用

井沢はこの山本の言葉を文字通り受け取っているがそうではあるまい。山本は激昂する日高に対し「お前は自負心が強過ぎて中央の命令を聞かず独断専行するのが心配だ（東郷ならその点安心）」と言った。

もし山本が明治天皇に対し日高に言ったのと同じことを言えば、天皇の前で旧友を誇ることになる。それは忍びないから「東郷は運のいい男ですから」と当たり障りのない言い方をしたに違いない。

加藤友三郎と島村速雄

加藤は日本海海戦時の聯合艦隊参謀長で秋山真之の上官に当たる。島村は加藤の前任者。私は「坂の上の雲」に登場する軍人の中では加藤と島村に強く惹かれる。但しこの小説の島村の扱いは甚だ不十分。

日本海海戦は、大陸との海上兵站路を巡る従たる戦争であって主戦場はあくまでも満洲平原。加藤はそのことがよく分かっていたので、あの大勝利に少しもはしゃぐことはなかった。司馬の表現を借りれば「日本の大勝利が決まった時も、加藤はまるで銀行員が一日の仕事を終えただけであるかのように平静であった」。親戚知人がお祝いを言い自宅に押しかけても、「何のことですか」と取り付く島もなかった。普通は自慢話の一節もぶつところだ。

加藤は後年原内閣の海軍大臣としてワシントン軍縮会議の首席全権を努め、軍令部の強硬派を抑えて条約締結に成功する。

その時加藤が軍令部を説得した論理がメモの形で残されている。以下引用
国防は軍人の専有物ではない。戦争は軍人だけでできるわけではない。国家総動員して当たらなければ目的は達成できない。分かりやすく言えば金がなければ戦争はできないということになる。日本と戦争の起こる可能性があるのは米国だけである。仮に軍備は米国に拮抗できるだけの力をもったと仮定しても、日露戦争の何倍もの金が必要となる。その金はどこから来るのか？米国以外に日本の外債を引き受ける国はない。だが敵国が外債引受に応じるわけではない。結論として米国との戦争は不可能ということになる。以上引用

対米7割に拘る軍令部がいかに視野狭窄で非現実的か、加藤はわかりやすく説いている。この加藤の認識を日本海軍軍人否日本の指導層の多くが共有していればと惜まれる。この加藤に長命が与えられず、返って日本海海戦の英雄東郷平八郎が長生きし、条約派の粛清と対米関係の悪化に貢献(?)したのは日本近代史の不幸であった。

島村速雄

東郷が、津軽海峡日本海側に移動する条件付き命令を発した時、島村は、敵艦隊は間違いなく朝鮮海峡を来ると主張し、移動に強く反対する。島村は非常に謙譲な人であったので戦

後もこの経緯を一切語らなかったのも、あの大勝利の栄光は東郷一人に帰すことになる。島村は土佐出身だが、同じ土佐出身でも俗物の永野修身（日米開戦時の軍令部総長）とはモノが違う。永野は「土佐が産んだ坂本龍馬以来の天才」を自称していた。

高橋是清

日露戦争戦費の凡そ 7 割は外債に依存した。ロンドンでその起債に成功したのが当時日銀副総裁であった高橋是清。昭和金融恐慌では、田中義一内閣の蔵相として短期間で収束に成功する。

高橋はなぜ二二六事件で青年将校の襲撃対象となったか？その疑問に答える彼の言葉がある。

一体軍部は、アメリカとロシアの両面作戦をするつもりか。軍人は常識に欠けている。その常識を欠いた軍人が政治に介入するのは言語道断、国家の災いと言うべきである。

小村寿太郎

一般に小村の評価は高いが私には大いに異論がある。

ポーツマス講和会議の際、場外の宣伝戦ではロシア全権ウイッテに完全に敗けていた。小村が世論の重要性を理解せず報道機関のあしらいが下手であったことが少なからず日本の不利に働いた。

交渉の最終盤で、樺太の南半分を領有することになったのは外務省の小村とは別のルートでロシア皇帝の意向を知ったためであり、小村の功績とは言えない。

最も遺憾であるのは、南満洲鉄道（いわゆる満鉄）の日米共同経営案をぶち壊したことだ。講和会議と同時期、東京では日本政府がアメリカの鉄道王ハリマンと満鉄の共同経営に関し合意に達した。日本は莫大な戦費を費やしたばかりで国庫は空であった上に、賠償金もと取れそうもなかったのも、この共同経営案は合理的であった。ところが講和会議を締結し帰国した小村が、この仮契約をぶち壊す。

小村はその理由として「満鉄はロシアが清国の同意を得て作ったものだから、清国の意向を無視して日本単独では処理できない」というものであった。一見もっともらしいが、小村は清国の意向などお構いなしに、武力で恫喝してでも日本への移譲を認めさせるつもりであったのでこの言いぐさは欺瞞的だ。現にその後の清国との交渉は、交渉とは名ばかりで日本が一方的に主張し、清国は不承不承認めるという体であった。

決定的であったのは小村が「ルーズベルト大統領も、共同経営案に反対です」と言ったことだ。当時は国際電話もないから、東京からワシントンのルーズベルトの意思を確認する術はない。小村は、ルーズベルトが反対する理由を述べていないので、これは小村のフィクションだと私は考えている。私が吉村昭の「ポーツマスの旗」を全く評価しないのはこうした私の疑問に答えるところがないからである。

講和会議で日本代表団が東京と交わす暗号電報がロシア側に解読されていたのも日本側

の不利に働いた。日清戦争の下関講和会議では、逆に日本側が清国の暗号電報を解読して極めて有利な条件で講和条約を締結したのとは対照的であった。

昭和20年日本の敗戦と同時に満洲にあった小村寿太郎と児玉源太郎の銅像が破壊されたのも当然であった。中国人にとってこの二人は日本の満洲侵略の象徴であったのだ。

日本支配下で満洲に油田が発見されることはなかったが共産中国建国後、黒龍江省で**大慶油田**が発見された。対米開戦は、米国の石油禁輸が直接の理由だった。もし満鉄の日米共同経営案が実現していればアメリカの石油探査技術を利用することができ発見できていたに違いない。そうなればインドネシアの石油を求めて対米英開戦する必要もなかった。

明石元二郎

百田尚樹氏やネットウヨは、日露戦争中の明石元二郎の工作を称賛する。百田は「明石工作は二個師団の戦力に匹敵した」と言っている。

彼らは一方で「大東亜戦争」に至る過程でコミンテルンや中国共産党の謀略を言い立てる。例えば張作霖爆殺、盧溝橋事件等。

我が明治人の謀略を称えるのであれば、敵の謀略に乗せられた昭和の軍人の愚かしさを慨嘆するのが筋だろう。

因みに明石工作が二個師団分の働きをしたこと、張作霖爆殺や盧溝橋事件がコミンテルン又は中国共産党仕業であることには根拠はない。特に張作霖爆殺が関東軍参謀河本大作によることは本人も認めた定説である。

石光真清

陸軍軍人石光真清はここで取り上げた人物の中で知名度は低く、司馬のこの本でも出てこないが、その自伝四部作は自伝文学の傑作であり日露戦争を深く理解する上で欠かせない。この本はシベリア出兵辺りから陸軍にはびこる中国蔑視、官僚主義、形式主義、立身出世主義を暴き、近代日本陸軍の裏面史（ということは日本近代史そのもの）として読むこともできる。

この本の内容は西南戦争、日清戦争、日露戦争、シベリア出兵まで及ぶが、ここでは日露戦争中のエピソードを一つだけ紹介しよう。当時石光は第二軍管理部長。

戦前知らぬものがなかった遼陽の戦いで戦死した軍神橋周太中佐は、石光の親友であった。石光が弔辞を読むことになったが、涙が溢れて書けない。それで同僚の軍医部長森林太郎（鷗外）に相談した処、森は「本当に親しい人の弔辞など書けるものではありません。私が代わって書いてあげましょう」、というわけで式当日森が書いた弔辞を読んだ後、「石光は大変な名文家だ」と評判になった。

三島由紀夫の若き日の文学の親友であり23歳で夭折した東文彦は石光の孫。三島の最後の作品「豊饒の海、第二巻『奔馬』」で神風連の乱を扱っているのは、東文彦が祖父から聞いた同事件から着想を得たもの。

鈴木貫太郎

日本海海戦当時、第四駆逐隊司令として従軍し水雷攻撃で大きな戦果を挙げた。当時の艦砲の威力では敵艦撃沈には至らないので、水雷攻撃でトドメを刺すのが一般的であった。当時鈴木は主役ではないが傍役として重要な任務を果たしたのだ。

侍従長の時、二二六事件で襲撃され瀕死の重傷を負うが辛くも一命を取り留める。

鈴木と言えば昭和20年8月終戦時の首相としての役割が重要だ。

長崎への原爆投下とソ連参戦という大凶報を受けて8月9日深夜開かれた御前会議はポツダム宣言受諾を巡って廟議が割れる。即時受諾（降伏）論は外相東郷茂徳、海相米内光政、枢相平沼騏一郎、「なおも条件交渉すべし論」は、陸相阿南惟幾、参謀総長梅津美治郎、軍令部総長豊田副武。鈴木は自分の意見は言わずに「天皇のご判断をもって本会議の決定とします」と強引に宣言する。天皇は即時受諾論を支持して降伏と決まった。

ポツダム宣言が発出された時首相鈴木貫太郎が「ポツダム宣言を黙殺する」と言ったのが英語では拒絶と訳されたことが原爆投下につながったと主張する人がある（鳥飼久美子さん）。鈴木が発言はこうであった。

「ポツダム宣言はカイロ宣言の焼き直しであり、何ら重要性を認めない。黙殺するのみ」この文脈で「黙殺」を「拒絶」と訳しても強ち不正確とは言えないだろう。鈴木は後に「ノーコメントぐらいのつもりだった」と弁解したが無理がある。

問題は、鈴木、東郷は、ポツダム宣言はしばらくコメントせず放っておくつもりだったが、陸軍が「連合国にあんなことを言われて政府は黙っているのか」と騒ぎ出したので鈴木は渋々記者会見を開くことになった。そうした状況で開かれた記者会見だったので単に「コメントしません」では済まなかったのだ。

東郷茂徳の戦後の証言

日本政府としては、ポツダム宣言に対する意思表示は暫くしないという方針であったのに、新聞に「日本政府は黙殺する」という記事が出た。それで自分は、「黙殺する」では閣議決定、戦争指導会議の方針と全く違うとしてやかましく抗議した。以上引用
東郷は「黙殺とはノーコメントとは違い、拒否のニュアンスが強い」と認識していたことがわかる。

森鷗外と夏目漱石

漱石作品「それから」から代助のセリフ（いずれの作品も時代背景は日露戦争直後）

何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もっと、大げさに云うと、日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。第一日本程借金を拵えて、貧乏震いをしている国はありゃしない。この借金が君、何時になったら返せると思うか。そりゃ外

債位は返せるだろう。けれども、そればかりが借金じゃありゃしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行かない国だ。それでいて、一等国を以て任じている。そうして、無理にも一等国の仲間入をしようとする。だから、あらゆる方面に向って、奥行を削って、一等国だけの間口を張っちまった。なまじい張れるから、なお悲惨なものだ。**牛と競争する蛙と同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。**以上引用

夏目漱石は、日露戦争後の日本の前途を悲観していたことがわかる。作中代助の話は漱石自身の思いだろう。

作品「三四郎」中、三四郎が進学のため上京する列車で乗り合わせた男の話

「あなたは東京がはじめてなら、まだ富士山を見たことがないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあったものなんだからしかたがない。我々がこしらえたものじゃない」と言ってまたにやにや笑っている。三四郎は日露戦争以後こんな人間に出会うとは思ってもよらなかった。どうも日本人じゃないような気がする。

「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「滅びるね」と言った。熊本でこんなことを口に出せば、なぐられる。悪くすると国賊取り扱いされる。

森鷗外

鷗外の墓は三鷹市禅林寺にある。その遺書「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス。中略 墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス」にある通り、「森林太郎の墓」としか書かれていない。鷗外の本業は陸軍軍医であった。軍医として従軍した日露戦争で脚気により陸軍兵士2万7千人も死なせたのは脚気菌説に拘った鷗外に大いに責任がある。

海軍軍医**高木兼寛**が、鷗外と違い脚気は白米主食とする栄養素の問題であると考え麦飯とパンを海軍の主食にして脚気の防止に成功したのと対照的であった。

冒頭書いたように鷗外が、墓に位階勲等を彫らないように遺言したのは、脚気をめぐり自身の失策を恥じていたからではないか。

永井荷風と斎藤茂吉

荷風「断腸亭日乗 1941年」の一節

6月15日

支那事変は日本軍の張作霖暗殺と満州侵略に始まる。日本は暴支膺懲と称してシナの領土を侵略し始めしが長期戦に窮し、にわかにな目変じて聖戦と称する無意味の語を用いだ

したり。欧州戦乱後英軍振るわざるに乘じ日本政府はドイツ・イタリアの旗下に随従し南洋進出を企図するに至れるなり。以下略

6月20日

前略

現代人の心理は到底うかがい知るべからず。余はかくの如き傲慢無礼なる民族が武力をもって隣国に寇することを痛嘆して措かざる也。米国よ、速やかに起ってこの凶暴なる民族に改悛の機会を与えしめよ。 以上引用

常に国策を支持し12月8日、対米開戦の報に狂喜した歌人斎藤茂吉とは対極をなす。以下に茂吉が開戦直後作った、日本軍の勇戦を称える短歌二首をあげておく。

絶待（ぜったい）に勇猛捨身の攻撃を感謝するときに吾はひれ伏す
大きみの続べたまふ陸軍海軍を無畏（むい）の軍とひたぶるおもふ